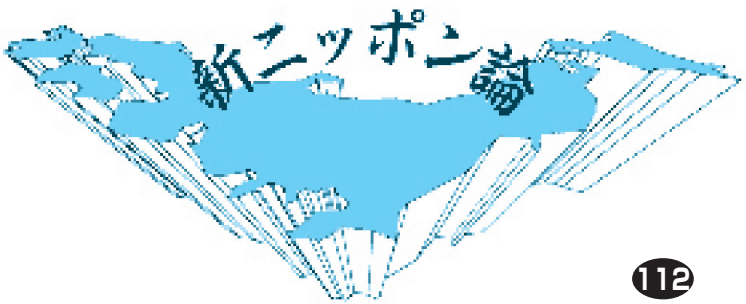
田中康夫の



112

「しなやかな是々非々」

「本質的なことで見た限り（中国に）政策の変更はない。将来想定される状況に於いて（台湾有事は）起きないと思っている」。垂秀夫・中国駐箚日本国特命全権大使は3月17日、日本貿易振興会JETROの講演会で発言。

遡って2020年秋、台北駐在2回の履歴を有し、第一次安倍晋三政権「戦略的互恵関係」も立案した彼の4回目の北京赴任時にNHKは「中国が警戒する男、大使になる」とHPで特集。が、その大仰な見出しとは裏腹に垂大使は奇しくも、「中国、イラン・サウジ関係修復を仲介　その先には台湾平和統一と石油人民元」と題して畏姉・遠藤誉女史が3月12日に寄稿の洞察力に富む分析と同じ認識を抱くのです。

誉さんは3月25日にも、中露首脳会談で頻出の「多極化」は米国の一極支配的先進国価値観の秩序でなく、中国がロシアやインドと共にグローバルサウスを包含した世界新秩序を形成するシグナルである旨の論考を発表。

僕は「時代錯誤なブロック経済に拘泥しているのはG7」と前振りし、内容を紹介ツイート。

「ウクライナはNATO加盟に関し『中立を保つ』として自国の平和を守ってきたのにジョー・バイデンがウクライナ憲法に『NATO加盟への努力義務がある』とさえ書かせた事実は多くの国際政治学者も認める国際法違反」。「故にウラジミール・プーチンがアメリカに抗議するのなら判るが、軍事侵攻するのは間違い。習近平も軍事侵攻には反対の立場。それを大前提としながらも何故、中露はここまで強烈に『多極化』を謳うのか？　嘗て日中国交を正常化の際、毛沢東は周恩来に『大同小異』と言わせた。中国はロシアの軍事侵攻には反対であるものの、それを『小異』と位置付け『大同』に向かって突進している」。

「中露共同声明　ウクライナ戦争の『和平交渉を求める中露陣営』と『戦争継続に寄与する日米欧陣営』浮き彫り」も23日に寄稿。

こちらも僕は「『話し合いで解決を』グローバルサウスと中露陣営が唱和し、マーク・ミリー統合参謀本部議長も『軍事力で目的達成は不可能』と告解。他方で『戦争こそ最大の公共事業』と嘯き、ウクライナ完全勝利まで徹底抗戦と絶叫する欧米日「先進国」首脳は、空路でなく片道10時間も掛けて鉄路でキーウ入りの眞相。武器供与は受けるも戦闘機の供与は受けられぬウォロディミル・ゼレンスキー政権は領土の制空権を確保し得ず。バイデン政権も訪問をクレムリンに事前伝達の屈辱」と連続ツイート。

「交戦国に必勝しゃもじ？　同じ戦いでもWBCじゃねえんだよ！内閣官房は誰も止めなかったのか」と日本政府の後出しジャンケン〝春の卒業旅行〟に言及した僕は、3年9ヶ月の任期を経て2月28日に離任した黒竜江省出身で朝鮮族DNAの孔鉉佑大使への日本政府の「塩対応」に驚愕。人口も面積もGDPも日本を遙かに凌駕する国家の特命全権大使が慣例に従い離任挨拶を申請するも岸田文雄首相が拒んだ一件です。

而も最初に報じた共同通信は「キーウ訪問を牽制し福島第1原発処理水放出に懸念を表明の中国に対する国内世論に配慮した慎重な対中姿勢」と肯定的に配信。更には産経新聞も東京新聞も全文無修正で〝呉越同舟〟掲載。「これぞ令和の大政翼賛『呆道』」と慨嘆するのも宜なる哉でしょ。

凄惨な「卡子＝チャーズ@長春 包囲戦」で日中両国の残忍残虐無慈悲さを経験の恩讐を乗り越え、「しなやかな是々非々」で中国の深謀遠慮を看破する畏姉・遠藤誉女史。弁証法なき徹底抗戦を唱和する「従米一本足打法」な「国際政治学捨」ムラ&「誤送船団」記者クラブとは月と鼈です。

★次号5月号の発行日は4月28日(金)です。